

2020(令和 2)年度学習成果アセスメント報告集

教学マネジメント会議 2021年3月25日

地域教養学科学習成果アセスメント報告	1
学習成果	1
学習成果アセスメント項目	1
項目別評価.....	1
1 教育課程に即した評価	1
1-①成績評価 (GPA) について.....	1
1-②取得単位数について.....	2
1-③学外学習への参加について.....	2
1-④資格取得状況について.....	3
1-⑤進路状況(就職・進学)について.....	3
1-⑥学習成果アンケートについて.....	3
1-⑦卒業時アンケートについて.....	5
2 幅広い評価.....	5
2-①学外における社会貢献活動について.....	5
2-②企業(施設等)アンケートについて.....	6
2-③卒業後アンケートについて.....	6
総評.....	7
生活科学科栄養士課程学習成果アセスメント報告	8
学習成果	8
学習成果アセスメント項目	8
項目別評価.....	8
1.教育課程に即した評価	8
1-① 成績評価(GPA).....	8
1-② 取得単位数.....	9
1-③ 校外実習での施設評価.....	9
1-④ 資格取得状況	9
1-⑤ 栄養士実力認定試験による栄養士としての学力評価.....	9
1-⑥ 進路状況(就職・進学).....	9
1-⑦ 学習成果アンケート	10
1-⑧ 卒業アンケート.....	10
2.幅広い評価.....	10
2-①学外における社会貢献活動.....	10
2-②企業アンケート	10
2-③卒業後のアンケート	10
総評.....	11

社会福祉科子ども福祉専攻 学習成果アセスメント結果	12
学習成果	12
学習成果アセスメント項目	12
項目別評価.....	13
1 教育課程に即した評価	13
1-①成績評価 (GPA)	13
1-②ルーブリック	13
1-③学習成果評価試験 (CBT)	13
1-④ポートフォリオ	14
1-⑤実習前評価試験 (CBT)	14
1-⑥実習先評価.....	15
1-⑦履修カルテ.....	15
1-⑧取得単位数.....	16
1-⑨資格取得状況.....	16
1-⑩進路状況 (就職・進学)	17
1-⑪卒業時アンケート.....	17
2 幅広い評価.....	18
2-①企業アンケート	18
2-②卒業後アンケート.....	18
総評.....	19
介護福祉専攻学習成果アセスメント報告	20
学習成果	20
学習成果アセスメント項目	20
項目別評価.....	21
1 教育課程に即した評価	21
1-① 成績評価(GPA).....	21
1-② 取得単位数	21
1-③ 資格取得状況.....	21
1-④ 進路状況(就職・進学)	22
1-⑤ 学習成果アンケート.....	22
1-⑥ 卒業時アンケート	22
1-⑦ 学力評価試験 (介護福祉士養成施設協会主催)・介護福祉士国家試験模擬試験基礎 編・応用編 (中央法規主催)	23
1-⑧ 介護実習評価 (実習指導者が行う評価)	23
1-⑨ 介護実習まとめ (学生の自己評価)	24

1-⑩	介護実習報告書（課題まとめ） ルーブリック評価.....	24
1-⑪	介護過程実践研究報告書 ルーブリック評価.....	25
2	幅広い評価.....	25
2-①	学外における社会貢献活動.....	25
2-②	企業アンケート.....	25
2-③	卒業後アンケート.....	26
	総評.....	26

地域教養学科学習成果アセスメント報告

学習成果

地域教養学科では、「建学の精神」および地域教養学科の「人材の養成及びその他の教育研究上の目的」に即し、以下の5点の汎用的学習成果を設定する。

1. 地域の人々から信頼され愛されるような人間性を持つ
2. 地域を知り、地域に貢献する意欲を持つ
3. 地域を生かすことについての豊富な知識を持つ
4. 多種多様の力を総合し、使うことのできる視野の広さを持つ
5. 地域に貢献しうる技術と表現力を身につける

また、地域から必要とされる学芸員・社会教育主事・図書館司書の育成を目指すところから以下の2点の専門的学習成果を設定する。

1. それぞれの分野における専門的な知識と技術を身につける
2. 地域を知り、地域に貢献する意欲を持ち、地域を生かす方策を探る技術と知識を持つ

学習成果アセスメント項目

1. 教育課程に即した評価

- ① 成績評価(GPA)
- ② 取得単位数
- ③ 学外学習への参加
- ④ 資格取得状況
- ⑤ 進路状況(就職・進学)
- ⑥ 学習成果アンケート
- ⑦ 卒業時アンケート

2. 幅広い評価

- ① 学外における社会貢献活動
- ② 企業(施設等)アンケート
- ③ 卒業後アンケート

項目別評価

1 教育課程に即した評価

1-①成績評価 (GPA) について

成績評価 (GPA) の 2017 年度生から 2019 年度生までの移り変わりを見てみると GPA の平均値は 2017 年度生が 2.9、2018 年度生が 2.97 であるのに対し、2019 年度生の GPA は 3.2 と非常に高い数値となっている。GPA 中間値をとっても 2017 年度生は 2.85、2018 年度生は 2.98 であるのに対し、2019 年度生は 3.27 である。GPA の最高値も 2017 年度生が

3.57、2018年度生が3.6であるのに対し、2019年度生は3.8で二人が同値となっている。本学科の成績評価は、原成績（テストの点数）から文字成績（S、A、B、C、D）への変換基準が科目毎、担当者毎によってまちまちであり、その意味ではこの数字で絶対的な何かを語ることはできないのであるが、相対的には2019年度生のGPA値は非常に高く、また、トップだけではなく、全体的にGPA値の高い卒業生であると言え、教育の底上げにもなっている。

1-②取得単位数について

取得単位数については3年間で大きな変化はない。卒業単位取得数の平均は今年度は66.9であり、必要な62単位にいくらか上乗せをして取得しているということである。資格関連科目を含めた総取得単位数の平均は95.3で、これも例年と変わらない数字である。本学科では社会教育3資格を取得できることが特徴である。3資格すべて取るとすると資格関連科目のみで50単位となる。卒業に必須な62単位と合わせると2年間の取得単位としては多すぎる数字だが、3資格は連関もしており、意欲ある学生が3資格すべてに挑戦をさせているのが現状である。

1-③学外学習への参加について

座学ばかりではなく実地に体験することで得られる教育効果は高い。本学科での学外学習の参加は以下の2種類に分けられる。

1つは地域教養学科の専門科目（地域教養科目とキャリアサポート科目を含む）でもう1つは社会教育3資格に関連するボランティア・見学・実習に関わるものである。

地域教養学科の専門科目にて行う学外学習は①「とかちの文学」の東中音更小学校の草森資料の見学、②「とかちの美術」の美術館見学、③「現代社会ととかち」の産業見学、④「地方行政論」の議会傍聴、⑤「インターンシップⅠ」の企業見学、⑥「インターンシップⅡ」での企業インターンシップ、⑦「インターンシップⅢ」のラジオ放送局でのインターンシップ、⑧「インターンシップⅣ」の通学合宿および公民館学習などがある。

2020年度はコロナウイルスの流行もあってこの多くの学外学習は中止を余儀なくされた。その中で行われたのは④「地方行政論」の議会傍聴と⑧「インターンシップⅣ」のボランティア参加のみである。

④は2020年9月16日に1年生10名で行われた。地方議会の役割を知ることが目的として音更町議会に出向き見学・傍聴をした。

⑧は2020年10月10日に2年生3名で行われた。本別町教育委員会主催で行われたアクティビティで小学1年生から5年生までの活動をサポートした。

社会教育3資格に関連する学外学習にはボランティアとして①帯広動物園の清掃奉仕、②音更町春・秋のクリーン大作戦、見学として③「博物館教育論」として帯広百年記念館の見学、実習では④「社会教育実習」として帯広市子どもの居場所づくり事業の「放課後子ども

広場)、⑤「社会教育実習」として「プラザまつり」「おびひろキッズタウン」への参加、⑥博物館実習、⑦図書館実習がある。

2020年度はこちらでも多くのものが中止、縮小せざるを得なかった。実施されたものは③、④、⑥のみであり、④も例年より回数を縮小しての実施であった。

③は2021年1月9日に1年生10人で博物館教育の目的や方法、その特性についての理解を深めるために行われた。

④は2020年10月24日から2021年2月6日の間で2年生17人が参加した。地域の大人が児童(小学生)に提供している、体験活動・交流の場にボランティアとして参加し、社会教育の理解を深めることを目的として行われた。

⑥は学外学習としては見学実習と館務実習があるが、見学実習は学内実施とし、「北海道立北方民族博物館」のオンデマンド見学を行った。また館務実習はそれぞれの学生が「美幌博物館」「帯広百年記念館」「幕別町ふるさと館」「神田日勝記念美術館」において、各5日間実施した。履修生は6名である。

1-④資格取得状況について

2019年度生の資格取得数は社会教育主事17名、学芸員基礎資格6名、図書館司書13名となっている。3年間でのパーセンテージでくらべてみると2019年度生は社会教育主事の資格を取得した学生が多いことが特徴づけられる。積極性の醸成、他者との接し方に対する反省等資格取得ばかりではなく有意義な体験の得られるものでもあり、この点の成長が卒業後にも見られることを願っている。

1-⑤進路状況(就職・進学)について

地域教養学科ではなかなか100%の就職率を出すことはできなかったが、2019年度生(2021年3月卒業)に限っては就職率100%(2名の進学者を含む)である。例年はほぼ96%程度で昨年度は81.8%と低かったのだが、今年度は新型コロナウイルスの流行もあって危機感をもって学生がしっかりと就職活動を行ったこと、また、毎年のことであるがキャリア支援課からのしっかりとしたサポートがあったことに尽きるだろう。今年度は公務員が多いのも特徴で8名(うち正職4名)、そのうち4名は図書館司書(正職1名)となっている。

1-⑥学習成果アンケートについて

地域教養学科の学習成果アンケートには①科目毎に学生に振り返り書いてもらうもの、②その振り返りや成績等他のデータも参照しつつ教員が振り返るもの、③1年前期末、2年の授業開始前、2年の終了時に学生が学習全体を振り返るものの3種類がある。①と②に関しては現在のところ専任教員のみを対象として行っているものであるが、そこから読みとれるものまとめと③の終了時の学生の振り返りからのまとめを記述してみたい。

○卒業単位科目について

①と②については②が①を包含する形になっているので、②を手がかりに主に学習成果の質的な面に関してまとめる。

2019年度生に関しては総じて真摯な取り組みと積極性を指摘する評価が多い。興味を持って、あるいは、自分で課題を見つけてその課題を結びつける形を持って授業を聴く態度が見て取れる。また、視野を広げようとしていることなども総じて地域教養学科の学習成果に沿った効果が見て取れる。量的な面で好成績であった部分が、学生の自己評価、教員からの学生評価でも裏付けられていると言える。

一方、教員側に不十分な点も見られる。2020年度は新型コロナウイルスの流行により zoom 等による制約もあったが、より学習成果の向上を図るための授業の工夫が要請されている。③の学期毎の振り返りを見てみると、全体的に肯定的評価がほとんどであって総じて学習成果を認めているようである。また、同じ人物の場合はほぼ同じ項目に対して同じ答えが付きやすいのだが22人中ほぼ7割の学生は1年前期時より2年の振り返り時の自分の学習状態を良くなっていると感じているようだ。また約3割の学生が少し悪くなっていると判断しているようでもあるが、これは学生の真面目さ故に厳しい評価になっているのではないかと感じる。

また、終了時アンケートにはDPに書かれた内容について具体的な自己評価も聞いている。この学生の自己評価も、全体的に獲得している、あるいは、ある程度獲得しているというものになっていて、教員側からの学生評価を裏付けるものとなっている。

○社会教育主事について

2020年度生については、自己評価から見限り、基礎的な事項や学習支援のあり方など応用的なことも含め、概ね理解したものと評価できるが、「説明できる」という観点では、今少しの指導が必要かと考える。

また、授業における「新聞」や「レクリエーション」など身近な素材の活用は、履修生の状況（態度）を見る限りでも知識として取り込みやすく、充足度が高いと推測できる。

2019年度生については、自己評価から見限り、目標は達成できたとするものが多いが、今年度の現状からして、実地経験の不足や、直接的な意見交換・交流不足が、達成感や自己成長の自覚に多少は影響しているものと考ええる。

ただ、「不足」に対しては、履修生なりに目の現状（実習）や課題提出にまじめに熱心に向き合うという状況が見て取れたため、成果につながるものと捉えている。

○学芸員基礎資格について

『学芸員養成の充実方策について』（「これからの博物館の在り方に関する検討協力者会議」平成21年2月）において明示されている「汎用性のある基礎的な知識(Museum Basics)」を資格課程全体の学習成果におけるコンピテシーと位置づけ、カリキュラム・マップに基づく系統的な学習を展開した結果、博物館専門職に対する深い理解と、課題の発見と解決にむけた意欲的な学習姿勢が醸成された。特に、博物館における実習や見学等を通じた学生の成長は顕著であり、地域の博物館との連携・協力を得ながら、学芸員基礎資格(学芸員補)

の養成と学びを発展させていくことの必要性と効果が確認された。

○図書館司書資格について

2020年度生については真摯な態度で受講し、図書館の基礎的な知識に関しては全体的に理解度が高いと評価できる。高得点ではなくとも努力が見られ、司書になろうとする姿勢と見て取れる。一方、課題解決型の課題や目録作成といった技術系の部分に関してはまだ未熟な学生も見られ、来年の演習で伸びていくものと期待する。

2019年度生についても授業態度は良く図書館関連の基本的な知識を養う科目に関してはほぼ問題なく、図書館の歴史、制度、通信技術等に関する理解は十分である。また、自ら積極的に地域の問題点を考察し、その方向を探るといった面においても2年生らしく深まった考察ができています。zoomによりワークショップが難しかったというところもあるが、主体的に考えることもできています。検索や分類といった司書としての技術面も基本的なところはできており、1年生からの進歩が見られる。反面、検索結果を簡潔にまとめる・わかりやすく伝えるという文章力の点であと一歩という学生も見られた。この点も指導をしていく必要がある。

1-⑦卒業時アンケートについて

総じて満足度は高いと思われる。多くの部分で全面的に肯定的かある程度肯定的な回答が目立つ。その中で相対的ではあるが不満が多い部分を挙げると就職や進学のための支援について、遠隔授業について、保健室・学生相談室の利用のしやすさについての3点である。就職と進学については他学科と違って多面的に支援をしなければならないのが本学科である。キャリアデザインを1年後期から開講するなどの改善を行ってはいるが、更に力を入れなければならない分野である。また、今年度は新型コロナウイルスの流行により例年行ってきた就職支援ができなかったというところもある。2021年度も同様な状況であることはわかっているため、その点を改善する必要がある。遠隔授業については、様々な通信環境の問題が複雑に絡んで原因が明らかでないところもあるが、よく聞こえないという事態が一定程度起こっていたようである。本学科、あるいは本学でできる対策を講じたい。また、遠隔授業では学生同士の横のつながりが持ちにくく、そこで学習意欲の低下にも繋がっていた。学習意欲の低下を多くの学生が指摘しているというわけではないが、他の項目に比べて有意に多かった。このように捉えている学生が一定数いることを意識しつつ改善を図りたい。保健室・学生相談室については、この評価が相対的ではあるが、低くなっているということは地域教養学科の学生が使いたくても使えないという状態があったのだと予想される。ここは学科の問題だけに収まらないが連携の仕方など対策を考える必要がある。

2 幅広い評価

2-①学外における社会貢献活動について

学外における社会貢献活動には①個人で行うもの、②サークルで行うもの、③学科・短大の

授業の一環で行う（あるいは勧める）ものがある。

①についてはコロナ禍という状況でもあり、短大、あるいは学科を通して 2020 年度に行ったものはない。

②については地域教養学科が中心に関わっているものとして図書館ボランティア「あすばら」サークルの活動があり、例年なら帯広まちなか歩行者天国（オビヒロホコテン）での「お話し会」も行っているが、今年に関しては音更町図書館での「お話し会」のみであり、感染がそれほど広がっていなかった 10 月 4 日、10 月 18 日、11 月 1 日の 3 回行っている。また、本学科の学生が多く所属している蘭華農園サークルでも 10 月 25 日に音更町青空ふれあい協議会主催の「おはよう青空市」に参加している。

③学外学習でも既にも書いているが、例年は帯広動物園の清掃奉仕、音更町春・秋のクリーン大作戦への参加などを社会教育主事課程の学生を中心に呼びかけて行っているが、今年度に関してはこれも中止している。

2-②企業(施設等)アンケートについて

企業からのアンケート結果は年によりまちまちでこれで卒業生を判定するには難しいデータである。卒業生はほとんどの項目で「業務に問題ない」という評価以上を受けているが、一番高い評価である「優れている」という評価のパーセンテージはほとんどの項目でそれほど高くない。それは地域教養学科卒業生の進路先が千差万別であり、それぞれの企業(施設)等から求められる能力も多様であることの結果だと推測できる。ただその中でも「主体的、能動的に取り組む」、「他人に働きかけ、行動を起こしていく」、「現状を分析し、目的や課題を明らかにする」「課題解決の計画を策定し、その実行に向けた準備をする」といったところは改善が必要とされる卒業生がどの年代でも 3 割ほど指摘されていて、本学科の卒業生の弱いところであると考えられる。まとめれば、本学の卒業生で弱いと指摘されがちなところは、能動的に課題を見つけ、協働し、解決を図るという分野であり、本学科としては PBL 型の授業をうまくとりいれて学生の主体性・能動性を伸ばすべきだということである。科目の中に反映させるよう考えていきたい。

2-③卒業後アンケートについて

卒業後アンケートとは「カムバック OOJC」という卒業生を短大に招待する企画の中でとられている「カムバック OOJC アンケート」のことである。この企画自体 2020 年度は中止となったので 2020 年度のアンケートは存在しない。そこで 2017 年度から 2019 年度のアンケートを振り返ってみると特徴的なところが見えてくる。設問 6「社会に出て(卒業後)必要となる能力は何だと感じましたか?(複数回答可)」があるが、この答えを見ると卒業生が社会に出てから必要と感じているもの、自分に足りないと感じているもの、大変だ・苦しいと感じている境遇が見えてくる。卒業生が最も必要・自分に足りないと考えているのは「コミュニケーション能力」である。また、「人間関係づくり」がそれに続く。また、「体力・健康」

「ストレス耐性」がその後に続いていて、卒業生の悩みも見えてくる。一般就職が中心の地域教養学科においては専門知識や専門技術よりも人間関係への対応がクローズアップされる傾向にあると言えよう。また、自由記述を見てみると「人前で話す」ことの訓練を短大で行っていて良かったと言うことや「ビジネスコミュニケーション」で会社内でのふるまいを知れたのが良かった、「社会教育実習」での異世代間交流が役立ったという感想も目立つ。学校生活のような均質な存在ばかりではない人間関係の中でのコミュニケーション力が必要であり、まだ足りないということが読みとれるものであると考える。

総評

総じて教育課程に即した評価は高く、高い学習成果が認められる。また幅広い評価の一環として行った卒業後の学生の自己評価・企業からの評価ではコミュニケーション力・人間関係構築力・積極性の面ではまだ留保がついているとも見える。さらに高めるため、留保のついた部分を伸ばすべく工夫していきたい。

生活科学科栄養士課程学習成果アセスメント報告

学習成果

生活科学科では建学の精神のもと、科学的に真理を探究し、いのちを大切にする心を持ち、職業的にも自立した人間として自ら成長していく向上心を持つ栄養士の養成を目的に、以下の学習成果を設定する。

- (1) 栄養に携わる者に必要な専門知識・技術を習得することができる
- (2) 健康や生命を預かるうえでの栄養管理、衛生管理を行う者として、責任や自覚を身に付け、主体的に考え行動することができる
- (3) 豊かな人間性と社会人として必要なコミュニケーション能力を身につけ、他者と協働することができる
- (4) 栄養・健康などに関する知識や技術を生涯学び続けることができる
- (5) 食を通して地域貢献ができる

学習成果アセスメント項目

1.教育課程に即した評価

- ① 成績評価(GPA)
- ② 取得単位数
- ③ 校外実習での施設評価
- ④ 資格取得状況(栄養士免許、フードスペシャリスト資格、家庭料理技能検定)
- ⑤ 栄養士実力認定試験による栄養士としての学力評価
- ⑥ 進路状況(就職・進学)
- ⑦ 学習成果アンケート
- ⑧ 卒業時アンケート

2.幅広い評価

- ① 学外における社会貢献活動
- ② 企業アンケート
- ③ 卒業後アンケート

項目別評価

1.教育課程に即した評価

1-① 成績評価(GPA)

成績評価である GPA については、2017 年度生の平均は 2.6 ポイント、2018 年度生は 2.6 ポイントと同じであったが、2019 年度生は 3.1 ポイントとかなり高い値だった。

2017、2018 年度生と 2019 年度生の大きな違いは、2019 年度生では、2.0 ポイント以下の学生が誰もいなかったことである。さらに、最低ポイントでも 2.29 だった。また、2017 年

度生では、2.0 ポイント未満の学生が全体の 14%、2018 年度生では全体の 16%を占めている。今回の各平均値は中央値と近似値であることより、2019 年度生はクラス全体で GPA が高いと思われる。

1-② 取得単位数

取得単位数の平均は 2017 年度生が最も多く、77.7 単位であったが、2018 年度生 76.3 単位、2019 年度生 76.2 単位とあまり変わりはない。

1-③ 校外実習での施設評価

校外実習での評価は、病院、福祉施設とそれぞれ施設側で評価をしてもらっている。内容は、研究心、意欲、礼儀と 3 つカテゴリーについて 5 段階評価で行われている。病院については、2017 年生、2018 年生、2019 年度生のここ 3 年間については、特に評価の大きな変動はなく、平均 4.4 の評価をもらっている。福祉施設では、年次の変動はあまりないが、3 年間の平均は 4.0 と病院に比べて低い評価傾向である。

1-④ 資格取得状況

栄養士免許の取得については、2017 年度生、2018 年度生では、各 1 名ずつ免許を取得せず卒業していたが、2019 年度生は全員免許を取得して卒業となった。

他の資格取得としては、フードスペシャリスト資格の受験者に対する合格率は 2017 年度生から 2019 年度生では、54.5%、64.2%、78.5%と合格率は上がってきている。

家庭料理技能検定 3 級は、筆記・実技試験に分かれ、それぞれ年 2 回の受験が可能となっている。筆記試験に合格した者のみが実技試験を受けることができ、筆記・実技併せて合格することで資格取得となる。2019 年度生の合格率は、96%となっている。その中には 2 級合格者が 3 名含まれている。2020 年度はコロナ禍だったため、筆記試験のみの受験となった。筆記試験の合格率は 80.9%だった。

1-⑤ 栄養士実力認定試験による栄養士としての学力評価

栄養士実力認定試験の A 認定は栄養士として必要な知識・技能に優れていると認められた者とされ、B 認定は栄養士として必要な知識・技能のあと一步の向上を期待する者、C 認定は栄養士としての知識・技能が不十分で、さらに研鑽を必要とする者として評価されている。2017 年度の A 認定者の割合は 27%、2018 年度は 18%、2019 年度は 24%と変動がある。また、C 認定者の割合は毎年増えてきている。C ランク層の改善が必要と考える。

1-⑥ 進路状況(就職・進学)

進路状況では、就職内定率は 2017 年度で 92.6%、2018 年度は 100%、2019 年度は 94.7%となっている。特に 2019 年度は就職希望者のほかにさらなる学びを求め、編入学をはじめ

とする進学者が5名いた。

1-⑦ 学習成果アンケート

学習成果アンケートについては前期、後期の年2回、受講科目ごとに学生自身の授業に対する取組み度合いや授業の理解度を含めた内容で実施している。アンケート結果内容については、担当教員のみ結果が提示され、個々の授業の改善につなげられている。

1-⑧ 卒業アンケート

2020年度はコロナ禍であったが、教員とのコミュニケーション、授業の進め方などについては90%近くが好評価であった。全体的な満足度も高かったが、自分の成長についての満足度は約80%の学生が満足していると答えているが、少数ではあるが満足できなかったと答えた学生の要因も見逃してはいけないと考える。

2.幅広い評価

2-①学外における社会貢献活動

学外における社会貢献活動は、授業の一環として行っているものが多い。地域のイベントへの参加や地域の事業団体との連携事業などが主である。しかし、2020年度は学外における事業ができず、ほとんど実施できていない。

2-②企業アンケート

2018年、2019年の企業アンケート結果では、全体を通して業務上問題のない水準という評価をいただいている。「指示を聞き取る能力」「自ら行動を起こすこと」の項目については、改善が必要であると評価している企業がある。この項目は連動する部分が多く、特に栄養士業務は、指示を聞き取り、その次に起こる作業のことを考えながら行動する力も必要となる。これらを少しでも改善させるためには、企画や段取りを考えるとといった授業内容の機会を増やすことができると考えている。

2-③卒業後のアンケート

卒業生を対象にしたアンケートでは、2017年、2018年ともに卒業後必要となる能力についての問いには、「コミュニケーション能力」「人間関係づくり」「ストレス耐性」をあげる卒業生が多かった。2019年の卒業生では、「責任感」「体力・健康」と答えている卒業生も目立った。学生が社会に出て年齢や性別の違う多くの人と働くということは、やはり容易ではないことがうかがえる。授業では、実習、実験などグループワークで行うことが多いが、ただ単にグループで作業しているから大丈夫と思うのではなく、その中でさらなるコミュニケーション力を高めるような工夫が必要と考える。

総評

2020年度コロナ禍における教育の取り組みは、手探りの部分も多く学習成果としてはどうなるのかと不安な部分もあったが、「教員課程に即した評価」項目は、検証してみると昨年よりも良い評価傾向であった。しかしながら、いつもと違う環境で過ごし、社会という集団に出ていったときに、卒業生が卒業後必要となる能力としてあげていた「コミュニケーション能力」「人間関係づくり」「ストレス耐性」などは、まさに重要な能力であり今後の課題として考えていきたい。

社会福祉科子ども福祉専攻 学習成果アセスメント結果

学習成果

社会福祉科子ども福祉専攻では、「建学の精神」および社会福祉科子ども福祉専攻の「人材の養成及びその他の教育研究上の目的」に即し、以下の学習成果を設定する。

【汎用的学習成果】

1. 一人ひとりの違いを大切に受け止めながら他者と「共に生きる」生き方について理解する。
2. 総合的な思考力、表現力を身につけ、それらを活用しながら成長を目指す意識を持つ。

【専門的学習成果】

1. 子ども家庭福祉、保育、幼児教育に関する基本的な理論や知識を身につける。
2. 子どもの心身の健康な発達に関する理論や知識をもとに、子どもの発達に合わせた適切な接し方や援助方法を選ぶことができる。
3. 保育内容とその指導法についての基礎的な知識を習得し、遊びなどの具体的な活動を計画し、実施することができる。

教材を研究し、子どもの姿に合わせて活動を工夫しようとする姿勢をもつ。

学習成果アセスメント項目

1. 教育課程に即した評価
 - ① 成績評価(GPA)
 - ② ルーブリック
 - ③ 学習成果評価試験 (CBT)
 - ④ ポートフォリオ
 - ⑤ 実習前評価試験 (CBT)
 - ⑥ 実習先評価
 - ⑦ 履修カルテ
 - ⑧ 取得単位数
 - ⑨ 資格取得状況
 - ⑩ 進路状況 (就職・進学)
 - ⑪ 卒業時アンケート
2. 幅広い評価
 - ① 企業(施設等)アンケート
 - ② 卒業後アンケート

項目別評価

1 教育課程に即した評価

1-①成績評価（GPA）

本専攻の 2018 年度，2019 年度，2020 年度の卒業生における累積 GPA の平均値，最高値，最低値，標準偏差は次のとおりである。

	平均値	最高値	最低値	標準偏差
2018 年度卒業生	2.55	3.76	1.50	0.49
2019 年度卒業生	2.54	3.47	1.47	0.49
2020 年度卒業生	2.78	3.80	1.55	0.49

2018 年度，2019 年度の卒業生については大きな値の違いはないが，2020 年度の卒業生においては平均値，最高値，最低値ともに上昇している。これは，2020 年度において COVID-19 の感染対策のために非対面授業が増えるなど，授業や評価の方法に前年度までとの変更点があったことが関係している可能性がある。平均値の変動にかかわらず標準偏差は 3 年間変化がないことから，本専攻の成績評価の分布は安定していることがわかる。

1-②ルーブリック

ルーブリック評価は，まだ導入検討の段階であり，卒業時の学習成果の評価指標として十分な整備ができていないのが現状である。現在，実習先での実習生の評価に関して，ルーブリックの作成を進めようとしているところである。いくつかの分野について個別のルーブリックを導入し，将来的には卒業時の学習成果の一部をルーブリックにより評価できるよう体制を整備しなければならないと認識している。

1-③学習成果評価試験（CBT）

学習成果のアセスメントの一環として，2020 年度卒業生を対象に，「卒業時学習成果テスト」を試行した。これは Computer Based Testing (CBT) を用いた客観テスト方式の試験であり，このテストのために資格，免許，卒業必修科目の各分野の内容から作成した 50 問の問題に 60 分の制限時間内で回答する。試験実施の 1 か月ほど前にこのテストの出題範囲の内容に関する「知識群」をまとめた冊子をあらかじめ配布し，学生が試験の準備をできるようにした。

2020 年度末，全ての成績評価が終了した 2 年生を対象にこの試験を実施した。本来であれば教室で監視のもとで一斉にタブレット端末で回答するというような実施方法を想定していたが，COVID-19 感染拡大防止のために登校が抑制されている期間での実施となったため，タブレットとスマートフォンなど複数の端末を用い，一方で問題に回答するとともにもう一方で回答する自分の姿をテレビ会議システムで教員に見せるという方法で実施した。

得点が合格水準の 60 点を下回った学生は 70 名中 9 名 (12.9%)，平均点は 71.7 点，最高点は 90 点，最低点は 46 点，標準偏差は 11.17 であった。この合格水準以下の学生のうち

8名については再度の試験を実施し、そのうち3名（再度の試験を受けていない者を合わせて4名）が合格水準に到達しなかった。2020年度は試行としての実施であったことから、これらの者に対するこれ以上の試験は実施しなかった。しかし、この4名のうち3名は保育士、幼稚園教諭の資格・免許取得者として卒業して保育現場に出ていくことになっており、教育の質保証という観点からは課題の残る結果となった。

1-④ポートフォリオ

本専攻の開講科目では、「思考と表現」「保育実習指導 I・II・III」「保育実習 I(保育所)」「保育実習 I(施設)」「保育実習 II」「保育実習 III」、「教育実習指導」と「教育実習」、そして保育内容「表現」関連の一部の科目などにおいて評価にポートフォリオ的な要素を取り入れている。保育者養成を目的とする本専攻の課程で中心となる実習関連科目で長期的な学習の過程を評価することは重要であるが、現状では個別の実習科目ごとの評価が中心であり、総合的な学習成果の評価として十分体系化されているとはいいがたく、この点には改善の余地がある。

1-⑤実習前評価試験 (CBT)

実習前評価試験は、社会福祉士養成施設で取り入れられている評価手法で、実習に関連した知識を問う客観テスト方式の CBT と、実際の行動水準での評価をおこなう OSCE とによって構成されている。本専攻ではこれを翻案し、実習に参加するにあたって最低限の知識の獲得を確認する試験として 2019 年度の 2 年生において擬似 CBT (CBT と同等の客観テスト方式だが回答にはコンピュータを使わずマークシートを使用) を試行し、2020 年度 1 年生の最初の実習前から本格実施した。

1 回目の試験では平均点は 69.8 点、最高点は 88 点、最低点は 28 点、標準偏差は 11.03 であった。72 名の受験者のうち 60 名の合格点に達しなかった者が 11 名おり、この学生には再度試験をおこない、全員が 2 回目の試験で合格点に達した（最高点 84 点、最低点 60 点）。

2020 年度入学者に対して最初の実習の前に実施した CBT では、当初教室に学生を集めてタブレットで回答を求める実施方式を予定していたが、COVID-19 感染拡大防止のために在宅で回答用の端末と試験中の受験者の姿を中継するための端末を用いる形で遠隔で実施した（通信回線の品質の問題で一部の学生は登校して受験）。1 回目の試験では受験者 75 名中 16 名の合格点未到達者がいた。平均点は 67.7 点、最高点 86 点、最低点 40 点、標準偏差は 11.96 であった。不合格水準の学生には再試験、再々試験を実施し、最終的に 3 名の学生が合格水準に達しなかった。このうち 1 名は資格、免許の取得をしないことになった学生なので実習にも参加しないことが決まっていたが、残りの 2 名については、実習に参加する上で最低限必要な知識が身につけていないとして 2 月に予定していた最初の実習への参加を延期した。これらの学生には 2021 年度始めのオリエンテーション時に再度の

試験を実施し、合格すれば実習への参加を認める予定である。

1-⑥実習先評価

本専攻の学生のほとんどは、保育士資格及び幼稚園教諭免許を取得するために、在学中に保育実習 I(保育所)、保育実習 I(施設)、保育実習 II または保育実習 III、教育実習の 4 つの実習を履修する。これらの実習科目では、実習生は実習先の指導者から個別に評価を受け、その結果は単位認定の際に成績評価の資料となる。

これらの実習科目で用いられている評価表は、A～D の 4 段階で評定されるようになっている。保育実習では C が「実習生として適切」、教育実習では B が「実習生として適切」という評価段階である。2019 年度入学者の実習先からの個別の評価について、A を 4 点、B を 3 点、C を 2 点、D を 1 点として集計した結果を次の表に示す。

	保育実習 I(保育所)	保育実習 I(施設)	保育実習 II	保育実習 III	教育実習
平均	2.73(n=71)	2.97(n=70)	2.81(n=63)	3.39(n=6)	3.11(n=70)
標準偏差	0.58	0.61	0.64	0.41	0.35
最大	3.73	4.00	4.00	4.00	3.92
最低	1.64	1.40	1.55	2.89	2.25

平均点で見ると、保育実習、教育実習ともに「実習生として適切」を上回る評価を得ていることがわかる。その一方で、個別の学生の中には「実習生として適切」の評価を大きく下回る評価を受けている者もいる。学生の資質とそれに応じた実習指導の方法のマッチングについての検討は不断に必要であるが、実習先によって評価の寛厳性のばらつきが大きいことの問題もある。この問題の軽減のために、実習先からの評価に利用可能なルーブリック的な評価基準を作成することも当面の課題である。また、現在使用している 4 段階の評価表が、「実習生として適切」以外の高評価と低評価のスケールに非対称性があることで「使いにくい」という声の実習先から出ていることから、「保育実習のミニマムスタンダード」(全国保育士養成協議会)の改定検討の動向をにらみながら評定段階を設定することが長期的な検討課題となるだろう。

1-⑦履修カルテ

「幼児教育実践演習(幼稚園)」は、2 年生後期に開講される幼稚園教諭免許と保育士資格の必修科目である。この科目では、卒業までの総仕上げとしてこれまでの学修を振り返り実践者としての課題を明確にするために「履修カルテ」を課すことになっている。

本専攻では、資格、免許の取得を希望する全ての学生がこの科目を履修しており、「履修カルテ」を作成し提出している。「履修カルテ」では 2 年生前期までに履修した全ての科目(実習を含む)に関する学習内容の振り返り、保育者としての実践的な能力に関する自己評価と課題点の記載をおこない、担任教員がコメントをつけて返却している。評価項目が非常に多く、また課題点には個別性が高く定量的な評価基準としては扱いにくいのが、学生はおお

むね自己の成長感と実践の場に出るにあたっての自己の課題についての認識を持つことができているようである。

今後の課題として、履修カルテの定量的な評価のために電子化を目指すことが挙げられる。

1-⑧取得単位数

本専攻の2018年度、2019年度、2020年度の卒業生における取得単位数の平均値、最高値、最低値、標準偏差は次のとおりである。

	平均値	最高値	最低値	標準偏差
2018年度卒業生	84.9	92	65	3.54
2019年度卒業生	84.5	88	65	3.00
2020年度卒業生	85.9	90	76	2.37

平均値には大きな変動はないが、2020年度卒業生で最低値の上昇と標準偏差の縮小が見られるのは、この学年の卒業生に資格・免許のいずれも取得せずに卒業のみを目指すことになった学生がいなかったことの影響と考えられる。

1-⑨資格取得状況

本専攻で取得できる資格・免許は社会福祉主事任用資格、保育士資格、幼稚園教諭二種免許状である。

社会福祉主事任用資格の取得に必要な履修科目は卒業必修科目に含まれており、本専攻においては卒業をすれば必ず取得できる。当然ながら卒業時の資格取得率は100%となるが、この数字にはあまり意味はない。

本専攻入学者はほぼ全員が保育士資格と幼稚園教諭免許の取得を目指している。卒業生数に対する保育士資格、幼稚園教諭二種免許状の取得率は、次の通りである。

	2018年度卒業生	2019年度卒業生	2020年度卒業生
保育士資格	97.0%	95.7%	93.0%
幼稚園教諭二種免許状	89.6%	94.3%	95.8%

2018年度卒業生の幼稚園教諭二種免許状の取得率が他の年度より低いのは、入学当初より幼稚園教諭免許の取得を希望しなかった学生がいたことなどが影響したと考えられる。それ以外ではおおむね93～97%程度の取得率であり、必ずしも保育者の適性がある者ばかりが入学してくるわけではない志願者全入の状況においては、適正な資格取得状況であると思われる。なお、2020年度卒業生でそれまでと異なり保育士資格取得者より幼稚園教諭二種免許状の取得者の割合が多くなっているのは、この学年よりカリキュラム変更があり、保育士資格取得に必要な取得単位数が教員免許取得よりも比較的多くなったことが影響している可能性がある。

1-⑩進路状況（就職・進学）

本専攻の学生は、そのほとんどが保育現場への就職を希望して、そのために必要な保育士資格・幼稚園教諭免許の取得を目指して入学してくる。また、保育所、幼稚園、認定こども園をはじめとする保育現場や、児童福祉施設など保育士の就職先となる福祉施設では職員不足の傾向が続いており、多数の求人が寄せられていることから、就職内定率（就職希望者数に対する就職内定者数の割合）は2019年度卒業生まで5年連続で100%となっている。

他の保育系の短期大学では、卒業生の就職先として保育所と幼稚園の割合は比較的拮抗している印象があるが、本専攻の卒業生は保育所保育士の志願者の比率が非常に高い。2019年度卒業生就職希望者では、保育士としての就職が55.1%（保育職公務員含む）と過半数を占めている。それに対して、幼稚園教諭として就職した者は11.6%、保育教諭として就職した者は17.4%、福祉施設等の職員となった者は11.6%、一般企業に就職した者は4.3%であった。この比率は近年比較的安定した傾向であるが、幼稚園教諭、保育教諭としての就職者の比率は近年微増の傾向が見られる。

2019年度卒業生の進路状況で例年と大きく異なっているのは、公務員としての保育職の採用が9名（13.0%）と多かったことである。この学年の卒業生にたまたま公務員志望の者が多かったということと、近隣町村での保育者不足の常態化がその背景にある。

1-⑪卒業時アンケート

2020年度卒業生の卒業時アンケートには、教員、職員、人間関係、遠隔授業時の支援、対面授業時の支援、奨学金、大学生生活の満足度の評価項目が含まれている。

教員に関して、ポジティブな評価（とても当てはまる＋まあ当てはまる）が多かった項目は「学生の質問や意見に適切に対応してくれる教員が多い」（79.4%）、「教育や指導に熱意を持っている教員が多い」（76.2%）であった。逆にポジティブな評価が少なかった項目は「人間的に魅力があり、尊敬できる教員が多い」（57.1%）、「勉強意欲を持たせてくれる教員が多い」（58.7%）であった。とくに、「尊敬できる教員が多い」に対するネガティブな回答は19.0%にのぼる。

職員に関しては専攻独自の要素が少ないのでここでは触れないが、職員は教員よりもかなり高く評価される傾向が見られる。

学生自身の人間関係に関しては、「クラスメイトとの人間関係は良好だった」でポジティブな回答が92.1%にのぼる高い評価であった。それに比べて「先輩・後輩との人間関係」「サークルでの人間関係」に関してはポジティブな回答が6割台とやや落ちるが、これはサークルに入っていない、あるいは学年を超えた交流の機会が少ない学生が一定程度いることを反映していると思われる。教職員との関係に関しては7～8割が良好と回答している。このことを考えると、尊敬できる教員が「多い」わけではないが「少ない」わけではない、ということなのかもしれない。少数の教員に対してでも否定的な印象を抱いた学生がいれば、それだけで教員全体の印象が悪くなる可能性もある。

遠隔授業時の支援では、「学習意欲を保ち続けることはできた」に関してポジティブな回答が 39.7%、ネガティブな回答が 28.6%、「本学遠隔授業期間の設定」に関してポジティブな回答が 46.0%に対してネガティブな回答が 36.5%と、他の項目よりもネガティブ寄りの回答分布になっている。遠隔授業期間の設定は大学の方針であり専攻としての設定ではないが、実技、実習系の授業が比較的多くある本専攻の特性として、遠隔授業期間が長かったことが意欲や満足度を低下させる要因になった可能性はある。また、教員が遠隔授業に不慣れであったことも影響していると考えられる。

専攻の対面授業時の支援でポジティブな回答が多かったのは「資格や免許取得のためのサポート」(79.3%)の項目である。ココアルーム(学生相談室)の利用しやすさに対してポジティブな回答が少なめだった(49.2%)のは、「どちらでもない」の回答率が 39.7%であったことを考え合わせると、利用したことのある学生が多数派ではないことを反映しているのかもしれない。

大学生生活の満足度の項目では、「自分の成長(人間性、身につけた資格や能力等)に満足している」(84.1%)、「所属の専攻に満足している」(81.0%)と、総合的には比較的高い比率でポジティブな回答が見られる。これは、資格・免許を取得することを目的に入学してきた、それなりの苦勞をしてその目的を達成したという経験をポジティブに受け止めている卒業生が比較的多数であることを示している。

2 幅広い評価

2-①企業アンケート

保育職へ就職した卒業生に対する評価として、コミュニケーション、挨拶、報告・連絡・相談についての高い評価、必要な文章作成能力についての一定の評価を受けている。一方、電話の取り次ぎ、情報伝達能力では不十分との評価もあり、電話での保護者対応に消極的との声もあった。保育者養成課程の科目としての位置づけが明確でない具体的なスキルについて教育課程の中でどのように取り入れていくかは、これからの検討課題と考えられる。

2-②卒業後アンケート

「カムバック OJJC」(ホームカミングデー)に参加した卒業生にアンケートの回答を求めているが、本専攻の参加者は卒業者数に比べてかなり少ない傾向があり、2017年が9名、2018年は1名、2019年は10名であった。統計的に処理するほどの回答数ではないが、おおむね本学での学修に対する満足感が読み取れる内容となっている。しかし、ある程度の満足感を抱いている卒業生にサンプルが偏っている可能性もあり、この内容から語れることは少ない。2019年度のカムバック OJJCは大学祭に併せて開催して比較的多数の参加者が見られたことから、今後の開催方法と参加者の増加のためには工夫の余地がありそうである。なお、2020年度は COVID-19 の感染拡大に配慮してカムバック OJJC の開催を中止している。

総評

ルーブリック評価及びポートフォリオに関してはまだ本格的な導入に至っていない点が課題として残っている。また、CBT など新しいアセスメント方法の活用を模索しているが、質保証の観点からはまだ不十分な段階にとどまっている。専攻の重要な目的の一つである保育者養成に関連した学外実習の実施とそのアセスメントに関しても、現状での課題は多い。

介護福祉専攻学習成果アセスメント報告

学習成果

社会福祉科介護福祉専攻では、「建学の精神」および「人材の養成及びその他の教育研究上の目的」、厚生労働省より提示されている「求められる介護福祉士像」「資格取得時の到達目標」に即し、地域社会に貢献する社会人となることを学修成果とし、以下のとおり専門的学修成果と汎用的学修成果を設定する。

専門的学修成果

1. 高齢者及び障がい者、その家族の生活課題に対するケアの実践において、高い倫理性を持ち、尊厳を保持し自立支援に向けたケアを計画的に実践・評価できる実践力が身につく。また、介護福祉専門職として各自の介護観を明確にし明言できる。
2. 地域の福祉的課題解決や地域共生社会における介護福祉専門職の役割について、幅広く福祉・保健・医療に対する理解や見識を持った上で考えることができる。また、多職種協働によるチームケアの必要性についても考えることができる。
3. 介護福祉に関連する現場における中核的な役割を担う介護福祉専門職としての誇りと責任を持ち、研鑽し続ける態度が身につく。

汎用的学修成果

1. 多様な価値観や文化を持つ他者に誠実な関心を寄せ、相手の立場に立って理解した上で思考し、主体性・協調性を持って行動することができる。
2. 地域・社会の事象に幅広く関心を持ち、多角的な視点で思考し、主体性・協調性を持って行動することができる。

学習成果アセスメント項目

1. 教育課程に即した評価

- ① 成績評価(GPA)
- ② 取得単位数
- ③ 資格取得状況
- ④ 進路状況(就職・進学)
- ⑤ 学習成果アンケート
(進級時・卒業時学生自己評価：資格取得時の到達目標に対する達成度)
- ⑥ 卒業時アンケート
- ⑦ 学力評価試験(介護福祉士養成施設協会主催)・介護福祉士国家試験模擬試験(中央法規主催)
- ⑧ 介護実習評価(実習指導者が行う評価)
- ⑨ 介護実習まとめ(学生の自己評価)
- ⑩ 介護実習報告書(課題まとめ) ルーブリック評価

⑪ 介護過程実践研究報告書 ルーブリック評価

2. 幅広い評価

- ① 学外における社会貢献活動
- ② 企業アンケート
- ③ 卒業後アンケート（カムバック OOJC 時アンケート）

項目別評価

1 教育課程に即した評価

1-① 成績評価(GPA)

過去3年間の介護福祉士の資格を取得した学生の成績評価(GPA)は、2017年度生2.49、2018年度生2.14、2019年度生2.6と平均ではほぼ横ばいである。2019年度生に注目してみると、成績評価(GPA)の高い学生は取得単位数も多い傾向であった。そのことから考えられることとしては、成績評価(GPA)の低い学生は、資格取得に必要な単位数以上に履修して単位を取る自信がないことが考えられる。また、成績評価(GPA)が3.36から1.84と幅が広く、上位層と下位層の2極化もみられることから、下位層の底上げが必要であると考えている。そのために成績評価(GPA)の個人の変化を評価しながら学生支援に活かしていく必要性や、なぜ低くなっているのか学生の背景も把握しながら支援していく必要性も感じる。そして、学力が多様化してきている学生に対して、学生の能力に応じた学び方の支援の在り方を考えていかなければいけないことも今後の課題として挙げられる。

1-② 取得単位数

介護福祉専攻においては、卒業に必要な単位62単位と、資格取得に必要な単位が89単位と異なっており、2019年度生においては、卒業だけを目指した学生が1名いたため、取得単位数が66から96とバラつきがみられる。資格取得に必要な単位数がかなり多いため、1-①でも記載したが、必要な単位数以上に履修して単位を取る自信のない学生がいるのではないかと考えられるため、最終的に取得した単位数を分析評価することよりも、履修届出時の学生の状況に応じた相談や支援体制を強化することが重要になると考える。

1-③ 資格取得状況

例年、卒業する学生全員が介護福祉士の資格を取得していたが、2019年度生においては、卒業だけを目指した学生が1名いた。その学生は、資格取得を目指して入学してきていたが、コロナ禍での遠隔授業の導入により、その学び方に対応できず、資格取得をあきらめざるをえなかった状況があった。個人因子としてストレス耐性が弱かったことも要因ではあると考えられるが、遠隔であっても学生の理解度や実習の準備の進捗状況など教員が把握できる体制の必要性を痛感させられた。今後、対面であっても遠隔であっても、資格取得を

あきらめざるをえない学生がいらないような支援の在り方を早急に検討していくことが必要であると考え。

1-④ 進路状況(就職・進学)

例年、介護福祉士の資格を取得した学生の就職は100%かそれに近い状況であり、集計時点で100%でない年も、その後就職している。2019年度生の卒業時、2名が就職内定していなかったが、すでに施設・事業所にアプローチをしている段階であった。近年、介護の現場では介護福祉士の資格を持つ者が、中核を担っていく存在として期待されているため、今後も就職率は100%を維持できると考えられるが、資格を持つだけでなく、質が問われることになるため、教育内容の充実が課題となる。

1-⑤ 学習成果アンケート

(進級時・卒業時学生自己評価：資格取得時の到達目標に対する達成度)

介護福祉専攻においては、厚生労働省が示す「資格取得時の到達目標」(11項目)が、本学で設定しているDPや学習成果項目よりも具体的に示されており、学生が自己評価しやすいと考え、学習成果アンケートとして導入している。5段階の評価であるが、11項目の平均は4.1、高い項目は「利用者ができるだけなじみのある環境で日常生活が送れるよう、利用者一人ひとりできる能力をみつける」が4.5、「介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる」が4.3、「利用者本位のサービスを提供するため、多職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる」が4.3、「他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける」が4.2、「あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する」が4.2であり、介護の実践や体験から身に付くと思われる項目は達成度が高い傾向にある。また、求められる介護福祉士像にある「尊厳と自立を支えるケア」などの介護福祉の基本理念に通じる重要な視点での達成度が高いことは、学生の自己評価ではあるが、アンケートには各自がつけた5段階評価の理由も記載してもらっているため、自己を客観視できている側面もあり、高い学習効果が得られていると評価してよいと考える。逆に低い項目としては、「介護に関する社会保障の制度、施策についての基本的理解ができる」が3.4と圧倒的に低い。これは、学んでいても実際に触れる機会がない(または少ない)ため、実感できないことが要因と考えられるが、後述する実際の知識としての理解度も低い傾向にある項目であり、複雑かつ変化を重ねる制度や施策について、実感を伴って学びが深まるカリキュラム編成や教育方法の検討が必要であるという課題が明確になった。

1-⑥ 卒業時アンケート

総じて満足度はあまり高いとは言えない状況である。しかし、評価を低くつける傾向がある学生は第一志望ではない学生であり、介護福祉士を目指していなかった可能性も高く、評

価が低い可能性がある。また、社会人入試の学生も低い傾向があるが、年齢の離れたクラスメイトとの関係性を築くことが難しかったことも考えられるため、今後はそのような学生の背景を考慮した支援の在り方を考えていく必要があり、教員自身の教育力向上を図る必要性が示唆された。

コロナ禍での遠隔授業などに対する満足感も低い傾向にあった。介護福祉専攻においては、演習系の科目も多い中、遠隔授業により授業内容に制約を受けた状況にあり、そのこと自体が学生のモチベーションを保てなかった大きな要因であると考えられる。しかし、時間割調整など煩雑化していた中でも教職員間での連絡・調整や学生への周知などの基本的な動きを、担任を中心に行う必要性があったと考え今後の課題が示唆された。また、今後も遠隔授業などの継続は必須であり、環境の整備や連携・調整などの他に、新入生に対する遠隔授業での学びの在り方などの事前の準備に対する支援も必要と考える。

最終項目にあった「自分の成長（人間性、身につけた資格や能力など）に満足している」の評価が他の項目よりも高い傾向にあったことは、高い学習効果が得られていると評価してよいと考える。

1-⑦ 学力評価試験（介護福祉士養成施設協会主催）・介護福祉士国家試験模擬試験基礎編・応用編（中央法規主催）

11月2日から12月17日の1か月半で、全国と比較できる3種の模擬試験等を実施した。結果、どの試験でも全国と比較して少し高い状況にあった。背景には10月から国家試験対策講座を遠隔中心ではあったが12回とそのフォローアップ講座として10回、計22回行っており、一般の受講生も1名いたことや、最終的な学習成果は国家試験の合格であることから、モチベーションを保ちながら取り組めた結果といえるのではないかと考える。

また、この3種の試験以外に、過去問などを学内模擬試験として、8月から国家試験直前の1月まで取り組み、その結果においては、全員の学生が得点を伸ばすことができていたため、国家試験に向けての取り組み（基本的知識の習得）は、高い学習効果が得られていると評価してよいと考える。

1-⑧ 介護実習評価（実習指導者が行う評価）

介護福祉士養成におけるカリキュラムは、領域「介護」の基本となる領域「人間と社会」「こころからだのしくみ」「医療的ケア」の4つの領域から構成されており、領域「介護」の中でも「介護実習」が集大成として重要視されている。そのため、その「介護実習」の評価を学習成果のアセスメント項目として位置づけている。「介護実習」の評価は、各施設・事業所の実習指導者の方に12から15項目（実習により違う）を5段階で評価していただくものである。まだルーブリック評価までには至っていないため、施設により評価のバラつきはあるものの、評価が低めの学生は固定している傾向にある（どの実習でも評価が低い）ため、学生によっては、その実習で習得できなかったことのフォローを受けないまま、次の

実習に行っているため、評価が低いままである可能性が高く、実習の事後指導や次の実習の準備において、その学生の習得状況に応じた個別指導の充実を図る必要性が示唆された。

今後の課題としては、ルーブリック評価を導入した上で、各学生の実習による積み上げができていないか評価し、その結果を学生と共有しながら個別指導に活用していきたいと考えている。

1-⑨ 介護実習まとめ（学生の自己評価）

各実習終了後に実習全般の振り返りとして、「特に感動したことやうれしかったこと」「利用者と接する上で特に戸惑った点や困った点」「特に意識して努力した点とその結果」「疑問点」「受けた助言指導」「反省点」「自己評価（5段階）とその理由」について、まとめの様式に記載しており、各実習の事後指導の中でそれを活用し個別指導している。

学習成果として読み取れることは多々あるが、自己評価の平均をみると、1年次の最初の実習が3.0であったものが最終の実習で3.6と実習を重ねるごとに高くなっており、知識や技術などの学習成果が積み上がっていると評価できる。個別にみると、5段階評価で2をつける学生は、実習を重ねるごとに減っているが、ずっと2のままである学生もおり、自己評価が低いまま（自己肯定感が低いまま）であることは、学習効果が得られていないということであり、対策が必要であると示唆された。

また、自己評価がどの程度客観的にされているか、実習指導者が行う評価と比較してみたところ、概ね自己評価と実習指導者の評価と相関していた。

1-⑩ 介護実習報告書（課題まとめ） ルーブリック評価

前述した「介護実習」において、学びを深めるための考慮として、各学生がすべての実習に共通して学びを深めたい「キーワード」を設定し、それに関連する課題を持って各実習に臨んでいる。すべて実習の終了後に、「キーワード」について深まった学びを考察し、まとめの報告集として資料化し、報告会を開催している。それをルーブリックで評価している。平均では83.1点であり、最高点は100点（1名）最低点は60点（1名）とバラつきがみられる。最低点の学生は、資料の提出が滞り（教員の指導を受けないまま）報告会に臨んだ学生であり、遠隔での指導においては限界もあり、低い評価は避けられない状況であった。ルーブリック評価の導入により、学生は何を目指して取り組むのか目標が明確になるとともに、指導する教員側も100点を目指して指導することができ、学生も教員もモチベーションが保ちやすく、結果、達成度が高くなり満点の評価が得られた学生がいたり、平均点が高かったことは、高い学習効果が得られていると評価してよいと考える。学生の能力の差もあるため、全員が100点を目指せるわけではない中で、学生に能力があると思われる状況であっても、評価が低い学生もおり、そういった学生については、教員の指導能力に問題があることも考えられるため、今後は教員の指導能力の向上を図る必要性が示唆された。

1-⑪ 介護過程実践研究報告書 ループリック評価

介護福祉士養成において、新カリキュラムでの重要ポイントの一つとして「介護過程の実践力の向上」が挙げられている。本学においては、2年次の約6週間の介護実習で「介護過程の実践研究」を展開している。一人の利用者の方を担当し、「情報収集」「アセスメント」「介護計画立案」「介護計画実施」「評価」の過程を実践する。その結果は、前述の「キーワード」と同様、報告書作成と報告会を実施し、ループリック評価を行っている。平均では84.7点であり、最高点は100点（3名）最低点は65点（2名）とキーワードのまとめ同様バラつきがみられる。キーワードのまとめの評価と比較すると、概ね相関しており、同じ担当教員から指導を受けているため、学生の姿勢の傾向や教員の指導能力に問題があったことも考えられるため、今後の課題が示唆された。

2 幅広い評価

2-① 学外における社会貢献活動

例年であれば、施設や事業所からボランティアの依頼が毎年60件前後あったが、今年度はコロナ禍のため、1件もなかった。手話サークルやボランティアサークルに来ていた依頼も今年度はなかった。それでも学生は依頼があった時には遠隔でも対応できるように準備していたことから、学生自ら「(変化が激しく予測困難な) VUCA World」を生き抜く力を備えていっているのではないかと思われ、今後はそうした学生の21世紀型能力を育てることができる環境整備や教職員の学力観の転換や授業間の転換が問われると考える。

また、例年であれば、授業等において、「地域交流サロン」の短大開催（学生主体）や「福祉まつり（音更町）」「福祉フェス（帯広市）」の手伝い、音更町の「福祉体験講座」や「認知症サポーター養成講座」の手伝い、「ケアカフェ」「Run 伴」に参加、ゼミの活動で福祉教育教材を作成し小学校に配布など社会貢献活動を行っていたが、今年度活動できたのは音更町の一人暮らしの高齢者に電話する「お元気コール」（ゼミの活動一貫）や、BSフジの番組へ全国の短期大学を代表して協力参加したことに限られてしまった。しかし、学生はそうした活動の意義を感じつつ、協力し合いながら取り組んでおり、コロナ禍だからこその学びも得られたのではないかと考える。

来年度はリモートでの「地域交流サロン」の実施も検討しており、社会貢献活動においては、より「VUCA World」を生き抜く力を育てる機会となり得るのではないかと考える。

2-② 企業アンケート

卒業時1年目に就職先にアンケートを行っているものであるが、その結果すべての項目において「改善が少し必要である」との回答を得ていることは、問題であるが、その中でも2018年度卒業生に「問題意識をもって仕事に取り組んでいますか」「自分で目標を設定できますか」の設問に「改善が少し必要である」と回答された卒業生が5名（21%）ずついたことは、大きな課題を示唆されたことになる。各卒業生の資質によるものもあると思うが、

学生主体の学びが重視され、「問題発見能力」と「問題解決能力」のを獲得するための授業展開が求められているにもかかわらず、そうした授業が展開されていない可能性を示唆する結果でもあり、早急に見直し改善する必要があることを示唆された。

2-③ 卒業後アンケート

2020年度は実施できなかったが、その前の2017から2019年度の「カムバック OJJC」時のアンケートから、「社会に出て必要となる能力は何だと感じましたか」の設問に15名中12名(80%)が「コミュニケーション能力」であると回答したことは想定範囲内であるが、「専門知識」が7名(46.7%)「専門技術」8名(53.3%)と約半数であったことに課題があると考え。介護の現場では資格のない方も働いている状況から、卒後間もない状況であっても、まわりと比較する知識や技術があると感じている可能性もあり、卒業後も研鑽を重ねる意識を高く持てない状況にあることが危惧され、卒後支援の重要性を示唆されていると考える。

総評

期せずしてコロナ禍での教育にあたり、Society5.0に向けた学校 ver3.0の時代へ待ったなしのところに来ていることを実感した1年であった。アクティブラーニングから「主体的・対話的で深い学び」への変換に対応する教育の在り方、評価の仕方などの課題に取り組んでいかなければと思っている。